

## 【グリニッチ便り号外「ああ大統領選」 追加文】

グリニッチ便りをお読みくださる皆さまへ

先日、グリニッチ便りの号外版をお送りさせていただきました。

何人かの方から積極的な応答もいただき、感謝していますが、「では福音的クリスチャンとして、どう考え、どう行動するのか」という一番肝心な牧師としての主張が欠落しているのでは、という厳しいご意見もいただきました。

改めて、読み返し、ご指摘の正しさの前に反省させられています、レスポンスとして、「追加文」を作成しました。最初の本文と同等の長さになってしまっています（いやそれ以上かも知れませんが）簡単に済ますことのできるテーマではありませんので、お時間がある時にお読みいただけたら感謝です。

----- 以下／追加文 -----

### では私たちはどうするのか？

グリニッチ便りをお読み下さっている方の中には数人のアメリカ人もいらっしゃいますが、大方日本人であられ、日本にいる方もあれば、米国駐在中、あるいは永住の方々です。

米国市民権を持ってなければ、残念ながら、選挙に参加することはできず、大統領選は傍観者として眺める形になってしまいますが、それでも、税金は納めますし、様々な義務も果たしています。政治は直接私たちの生活に影響を及ぼすものですから、限られた参加しか出来なかったとしてもその限られた中ではすべきことをするのが、まず神の前に求められていることです。

今回は初の NON-WASP 同士の対決と書きましたが、WASP だから大丈夫などとは一つも思っていない。どういう人が立つにしても、世界でいちばん強大な「権威」の座の一つである米国大統領の座に座る人を決める大統領選です。祈りを持って成り行きを見守って行きたいと思えます。

そこで、選挙権がある、無に関わらず、基本的にクリスチャンとして政治参加に関して、何を大切にしていけばいいか、そして特に大統領選挙を前にして、リーダーにはどんな基準が求められるのか、聖書が示しているガイドラインを10項目、私が確信しているところから挙げてさせていただきます。

教会の歴史を眺めて見た時に、教会と政治／religion and politics は常に難しいトピックであり、クリスチャンも色々な立場をとって来ました。最終的には、ローマ14章の勧めにあるように、おのおのが御言葉から確信を得る、ということに尽きますが、クリスチャンの方には、ぜひ、聖書に戻っていただいで自分の確信を得ていっていただきたいと思えます。

お読み下さっている方の中には、クリスチャンでない方も多くいらっしゃいますが、ぜひ、政治のことに考えるに当たってのヒントにいただけたら幸いです。

#### 1) 神の御前における謙遜と恐れが行動の原点になっているか。

**箴言1:7 主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。**

**箴言9:10 主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ること**  
**は悟りである。**

これは私たちを含め、すべてに人が心に刻むべき言葉ですが、特に大統領、首相は、誰にも増して、知恵、知識を必要とする

職務です。聖書は全ての知恵と知識の土台は、神を恐れることである、神の御前での謙遜とへりくだりだ、と言っています。

為政者は、自らが、神からの格別厳しい裁きを受ける存在であり、第一義的に、神に対して義務を果たす存在であることを知らなければなりません。隠れたところで何をするか、は、神に対する恐れを持っているかいないかによって決まってくるのです。

#### 2) 「人間の尊厳」を神からものとして真剣に信じているか

**創世記1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。**

人の尊厳は「天の神」から来る、という根本が揺らぐとき、人の命の価値は相対化し、人の価値を人が決めることになってしまいます。

アメリカの独立宣言の序文に

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain inalienable rights, that among these are life, liberty and the pursuit of happiness.

「我らは以下の諸事実を自明なものと思ふ。すべての人間は平等につくられている。創造主によって、生存、自由そして幸福の追求を含むある侵すべからざる権利を与えられている。」

とありますが、この世界観を持っているかいないか、は政治家を選ぶ時に、最も重要になって来ます。奴隷、墮胎、死刑、安楽死等の難しい問題の根本には、この世界観の問題があるので

す。神を恐れる立場に立って、人間を観ることが出来ない時、権力者が何をしようかは、過去の歴史を見れば一目瞭然です。

---

### 3) 「人間の罪性」を正面から見据え、正しく規制する立場に立っているか

---

**ローマ3:23-24** **すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。**

**And whereas it is the duty of nations as well as of men, to own their dependence upon the overruling power of God, to confess their sins and transgressions, in humble sorrow, yet with assured hope that genuine repentance will lead to mercy and pardon; and to recognize the sublime truth, announced in the Holy Scriptures and proven by all history, that those nations only are blessed whose God is the Lord.**

(国家、及び人の責任とは、すべてに及ぶ神の支配に自らが依存していることを認め、謙虚な悔悛の情を持ち、神は純粋な悔い改めに対して恵みと赦しを持って応えてくださるとの確信を持って、自らの罪と咎を告白することである。また聖書に宣言され、全歴史が証明しているところの崇高な真理、つまり主をおのれの神とする国のみが、祝福されることを認識することである。)

これはリンカーンの国家断食日(1863年3月30日)の一部ですが、大統領自ら、人間の墮落している状態を認め、罪と咎を告白し、神の御前に悔い改めることを「国民の義務」として訴えています。

今日の最も大きな問題は人々が聖書から離れてしまったために、「人間の罪性」に関する理解が極めて曖昧になってきていることです。

リベラルを宣言する人々は、我々は神を卒業した、神は死んだ、神の基準はいらない、と高らかに宣言しますし、保守を名乗る人々においても、聖書離れが進んでいる現在、いざとなったら自分が何を根拠に保守的な立場に立っているのか説明できません。

ゆえに「聖書がいう罪」の基準を今の人々に「押し付ける」ことの無理はありますが、★★★人々に罪の認識を与えることは、教会の責任であり、またリンカーンが語ったように、悔い改めと神の赦しの福音を人々に伝えることは教会の任務です。

為政者を選ぶ際には、しかしながら、この人間の罪性に関する認識が備わっていることは極めて重要です。なぜなら人間の権力欲、罪性こそ人間のもっとも恐ろしい力だからです。

米国の三権分立の思想が200年以上この国を支えて来ましたが、これが正常に機能して来た理由は、罪深い人間が権力を手にすると「圧制・暴政」が始まるという認識があったからです。為政者がこの基準に立っているかは厳しくチェックしていく必要があります。

---

### 4) 神の賜物である自由意志を尊重し、自己責任の原則に立っているか。

---

**創世記2:17** **しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」**

人が愚かな選択をしたときに、その結果を被り、反省して立ち直ることができるならその人は成長するわけです。プロテスタントが土台にあったということは、アメリカ人の多くが、罪人に対する神の赦し、つまり、神がセカンドチャンスを与えた、という信仰に立っていた、ということです。

ですからこのアメリカという国は、やり直そうとする者たちに新たなチャンスを提供することに関しては積極的であり、機会は均等、やり直しが利く社会、ということで、今まで歩いて来

たのです。一度失敗すると再び立ち上がれなくなってしまう日本やヨーロッパと大きく違うところかも知れません。

しかし、今、ここが崩れて来ているのではないのでしょうか。その一番大きなところが、自己責任を追及せず、すぐに誰かのせいにし、政府が何でも「尻拭い」しようとするようになってきていることです。

こういう社会は長く続かないのです。社会主義国家の崩壊、今のヨーロッパの渾沌の根本原因は政府が神のごとく振る舞おうとしていることから発しているのではないのでしょうか。人は神ではないのです。

---

### 5) 「共同体の基本単位は夫婦・家族」との確信に基づき、その保護のために戦うか。

---

**マラキ4:6** **彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」**

人間社会はすべて「信頼」で成立っています。その信頼の力がいちばん養われるのは夫婦関係であり、親子関係です。この夫婦間、親子間の「信頼」の絆の強さが社会の絆の強さであると

いう確固たる信念に立って、夫婦、親子をサポートする立場に為政者は立ってなければなりません。

神が定められたこの基本的な単位に対する攻撃は執拗にあります。聖書の中でいちばん最初に壊れたのは、神と人との親子関係であり、次に、夫と妻の夫婦関係です。その意味では、「夫婦・親子」関係は壊れたところから始まっていることを認識しなければなりません。

---

6) 世界、更に国内に広がる貧困・飢えの問題に取り組む姿勢があるか。

---

**ルカ12:48b すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。**

貧困の問題、飢えの問題については聖書がもっとも多く語っていることの一つであることを忘れてはいけません。日本もアメリカも多く与えられています。それゆえに多く要求されています。

この問題に真剣に取り組む姿勢を政治家が持っているかは、とても大事なのですが、気をつけるべきは、地域社会の活性化、人の自由意思とやる気を出させる政策の策定、等を励ます姿勢に立っているかがいちばん肝心なことになるのではないのでしょうか。

キリスト者は「政府」にこの関係を直してもらうことを求めるものではありません。福音の宣教、真理の伝播、悔い改めと神の力によって夫婦・親子が回復して行く働きをしていきます。時が良くても悪くても、です。

人を常に一部金持ちや大企業の「犠牲者」の状態に仕立てておくことで多くの政治家は「票」を集めるのですが、これは正しいことなのでしょうか。また貧困地域にフードスタンプを支給することが一時しのぎではありますが根本問題の解決ではありません。

アメリカの良き伝統があるとすれば、個人が、自発的に隣人を助ける、という姿勢です。政府がなすべきことは、この個人から個人へのサポートを励まし、互助的な地域開発を励ますことです。

スモールガバメント（小さい政府）と言われるのはここから来ます。今問題になっている国民皆保険の是非の根本問題はこの当りにあるのです。

---

7) 戦争はあらゆる外交努力がなされた最後の手段としてのみ用いるという立場に立っているか。

---

**マタイ5:39 しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。**

**ローマ13:4 彼（支配者）があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行うなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います。**

上記の二つのみことばのバランスをとることは難しいことです。特に大統領になるものは、軍隊の総司令官になるわけであって、

いざ侵略や攻撃、人権蹂躪が目の前でおきているときに、軍隊の出勤を命じる責任はあるのです。

現実に目を覆って平和主義を唱えることはナイーブですが、キリスト者の責任は常に「平和」を作り出すことである、という立場に立っているか、問われます。その意味で、真の平和を作ることに熱心であることはどんな政治家にとっても重要です。

他の国の主権を越えて、戦争を起したり、暗殺を行うようなドロウンアタック等前政権、現政権のありように対して、キリスト者は本来もっと反対すべきだと信じています。

---

8) 神が「自然界」の管理責任を人間に与えておられるとの認識に立っているか。

---

創世記1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、-地をはうすべての生き物を支配せよ。」

環境を治める責任は神が人間に与えた大きな責任です。神は自然を利用することを禁止してはいませんが、正しく管理することを命じられています。罪を犯したその時から、人間は正しく

自然界を管理する能力を根本的に失っている、という認識に立ちつつも、神に立ち返り、神の知恵を仰ぐキリスト者が率先して自然環境を大切にしていくことは相応しいことです。為政者には、人間が生きる環境を整える責任と、同時に、自然と共生していく責任の両方をバランスさせる知恵が必要です。

---

9) 誰が選ばれてもキリスト者には為政者のために執り成す責任がある

-----  
**1テモテ2:1** **そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。**

これは政治家を選ぶ、国民の責任ですが、この御言葉の勧めに従い、礼拝でも個人の祈りの時間においても、自分が支持する政権／大統領・首相であろうとなかろうと、彼らが正しい政治を行うことができるように、執り成して祈ることが求められています。

為政者は皆、神の前にことさらに大きな裁きを受けることになることを覚えたいと思います。また、政治が安定することで、人々の生活が守られ、その中で人々に神に立ち返るチャンスが与えられるのです。

どのような政治体制の中にあっても、基本は、定められた方法をもって社会に参加し、訴えをし、選挙でものごとを勝ち取っていくことが求められています。

アメリカは4年に一度の大統領選挙、その間に国会議員達の選挙もあり、国民が政策変更に関与する機会が与えられており、そこに積極的に参加していくことが求められています。

-----  
10) 秩序を守り、権威に従うが、神に従うことが留められるなら神に従う

-----  
**ローマ13:1-2** **人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。逆らっている人は、神の定めにとむいているのです。とむいた人は自分の身にさばきを招きます。**

この御言葉がかれたのは、ローマの時代、キリスト者に対する迫害すらあった時代です。その中で「権威に従え」という使徒パウロの命令にはかなりの反発もあったことでしょう。しかし理由はその権威ですら「神による」からなのです。

悪い為政者の場合、その為政者に対する裁きは、神に委ねる、という立場に立つべきであり、キリスト者は武力的な「革命」を通して社会を覆すという方法をとるべきではないのです。

社会を変えるには、選挙や裁判等を用いて政治を合法的な方法で変えていくことがキリスト者の責任です。

しかし、政治が内心の自由に抵触してくる場合が出てきます。その場合には、キリスト者は投獄を恐れず、殉教を覚悟して来ました。ガンジーの無血革命も聖書の教えに基づいているのです。

使徒4:19 ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。

私たちは剣を持って権威に逆らう道は取りませんが、神を礼拝する人間の根本責任を否定してくる権威に対しては、主にあって抵抗することが求められています。

今、内心の自由に対する攻撃が強くなってきています。そのことを意識しつつ、為政者を選んでいく必要があるのではないのでしょうか。

-----  
結局、沢山書いてしまいました。推敲不足もありますが、まずは皆さまに投げ掛けます。

簡単なテーマではありませんし、まだまだ、実際の適用となったらどう考えて行ったらいいのか、難しい問題も沢山あります。神は共和党でも民主党でもありません。自民党でも民主党でもありません。人間の不完全な政治的な仕組みの内にも、憐れみを示してくださる方、私たちが時期尚早に滅びないようにブレーキをかけ続けてくださる方です。

ゆえに最後になりますが、どのような状況の中でも、大統領、首相が「神から任務を託された神のしもべ」である、ということ覚え、彼らのために執り成すこと、祈ることを再度、確認したいと思います。現大統領も、前大統領も、いかにその仕事に激務であるかは、彼らの「白髪」と「顔のしわ」がよく現わしています。また、同時に、大統領も、首相も「救世主」ではないことを肝に銘じましょう。「この人を選んだら！」と過度な期待をすることはキリスト者のすべきことではありません。彼らは私たちと同じ、罪ある人間であり、神の憐れみを必要とし、神の知恵を必要としています。

「ああ大統領選」という生煮えの文書を出してしまったがために読まれた方の内に、憤りの情や、この者に対する不信感を持たれた方には真摯にお詫び申し上げます。今後ともよろしくこの愚かな者とつきあってくださいますよう、お願いしつつ。

立石尚志